

シベリア抑留記

滋賀県 角田 繁造

農家の長男として生れ、戦争中ですので食料増産米作りに励む。家族三人暮し。

昭和十九（一九四四）年十月十八日現役として入隊、満州三一〇四部隊となり広島集合。博多から釜山に渡る。朝鮮を横断して満州穆稜到着、野戦重砲兵として入隊、内地では秋、稲作の取入れですが、現地は積雪が三十センチぐらいの寒い気候でした。初年兵として軍事教育を受け、起床から消灯までラッパの響、軍人勅諭、戦陣訓の厳しい軍人教育でした。

四月に本隊は内地の近衛野戦重砲に出動になりました。自分は入室していたので琿春の満州一二一五部隊ヨ隊に転属となりました。体の調子が悪く再入室となりました。八月九日ソ連との開戦となりました。敵地から近くのため撤去となり、部

隊全部が蜜江に後退。山道一本の谷間を通り河原地に陣地を取りました。昼間はソ連軍の爆撃機銃で蛸壺に避難、夜になると照明弾、動くことも出来ない。所々で火災が起きている。いよいよ明日、戦車に突入か。山道の草むらに身をひそめ、箱爆雷を戦車の目前に投げる。キャタピラが壊れて立往生。後続車両を阻止する。しかし兵隊が戦車に犠牲になり戦死する。食事は蠟燭の火で飯盒で炊く。煙が出ると敵にわかるので、缶詰で食事。いよいよ明日は玉砕だと、飯盒の蓋で酒を頂いた。終戦は知らない。

八月十八日、日本軍の小隊長が乗馬で白旗を立て敵地に向う。不思議に思ったら休戦の連絡だ。日本は勝ったのか負けたのか、負ける訳がないと信じる。しばらくして日本は戦争に降伏だと聞いた。武装解除されるから整列せよの命令。持物は水筒雑嚢だけ、時計万年筆は没収されてしまう。峠を越えれば昨日まで敵地である。血生臭い。気温は三〇度を越えている。ソ連兵の死骸は道路端

に並べ、毛布が掛けられていた。日本兵は血まみれで戦死している。中には足の負傷した者がはいながら、私も行きたいと言う者もいた。また顔面の負傷者は血だらけ包帯で、手を出して行きたいと言っている者もいた。しかし自分だけで精いっぱいだ。ソ連兵はUSAのジープ、言葉は通じないが走り回っている。自分は病気なので琿春の糧秣庫へ収容された。近くに野戦赤十字病院があった。昨日まで戦ったソ連兵にも負傷者が多く、松葉杖で歩く姿。また病院の裏に死者の埋葬者多く、木柱が立っている。日本兵は戦友で穴を掘るのが精いっぱい状況。自分は外傷もないので吉林からの部隊に編入され北へ北へと行軍。水が無くて玉蜀黍の幹を噛みしめる。道端の水は泥水で濁っているから飲めない。食糧は乾パン一食五個、水は飯盒の蓋に半分程度、そのうち列車に乗り東京ダモイと言われ内地に帰れると信じた。列車は北へ北へハバロフスクまで来た。これは大変騙された、仕方がない。列車は北上を続ける。コムソモ

リスクまで来た。連絡船がある、河幅四キロぐらい。いよいよ乗船してニコラエフスクへ出て樺太へ帰れると信じた。乗船連絡船の貨車の間にすしづめになり出航だ。約一時間で到着、下船だ。周囲は山に囲まれ、収容所は鉄条網に、四隅には監視所だ。東京ダモイと騙された。周囲は二段造り四人ベッドです。壁には南京虫が潜んでいる、夜になると出て噛まれる、寝られない。衣服にはシラミがわき、暇があると脱いで取る。夏季は日本と同じぐらい温度が上り暑いです。衣服を脱いで作業すると日焼けして赤くなり、皮膚が水膨になり、ばい菌で化膿する。背中の場合一カ月ぐらい上を向いて寝られない。冬期は満州より寒い、零下二〇度〜三〇度ぐらい下る。瞬きすると睫毛がひつつく。アムールの河幅は四キロぐらいです。冬期は凍り付いて連絡船が通れないので、一月から河の氷の上に枕木レールを並べ、河底から水をかけて凍らせ、列車を運行する。四月ごろまで。鉄道工事は保線で、枕木の下へ碎石を入れる作業。

煉瓦造りは粘土を練って煉瓦の大きさに作り、乾燥棚で乾燥し、釜に入れ火を入れる。連絡船の使用は食糧品の積み下ろしが多く、軽労働で楽しみでした。山羊肉だと片足折り、被服に隠し昼食時に焚火で焼いて食べる。メリケン粉運びは担いだまま袋の角を噛んで破り、軍袴の中へ流し込む。兵舎に帰りテントの上で裸になって、こねてペーチカで焼く。よく監視してしないと同僚に取られる。この作業につくと体重が増える。毎日一回の身体検査で増えると重労働、土木伐採に回される。蛇は皮をむいてスコップ上で焼く。動くから焼きにくい。食べるとおいしい。蛙はどんな蛙でも食べました。春になると、よもぎ・おおばこ・あかぎ・アイス葱などをスープの中へ入れ、岩塩も入れた。また毒草もあるので下痢して死ぬ者もいた。煙草は配給が少ないので、ソ連兵の吸殻や煙草の木の根を刻んで吸ったが、辛いばかり、煙が出るだけで気休めでした。

収容中にソ連が、家族に内地へハガキを出せと

言うが信用できない。しかし、着けば幸いと思いきなで漢字は使わないで書いた。

二十二年八月全員集合点呼、その時、この収容所で内地帰還が発表された。始めは信用ならないしかしナホトカ集合との命令で、その中に自分も発表された。半信半疑。その時以前に内地へハガキを送ったので内地の家に着き、返信が収容所まで届き受け取りました。父親の字が浮かんで二重の喜びでした。整列してナホトカへ集合となりました。海岸まで来た時、引揚船（高砂丸）を見た時、昔懐かしい船員さん、高砂丸の漢字を見た時、本当に帰れると信用できました。船内は平穩で日本海の真ん中ぐらいの九月六日は、郷土秋祭りの日でした。日本の山々、舞鶴の景色、松の木、白壁の土蔵、国民皆様の出迎え、非常に嬉しく早く両親に会いたいと、思いがつのるばかりでした。